

海雀



Umi-Suzume

第2号

2006. 12. 22

「ネットキャンパス開通式典」鶴間和幸	(2)
「海からみた文化交流の歴史—東アジア海文明を考える—」森部豊	(3)
「隋唐期東アジア仏教の宗派意識」馬淵昌也	(4)
「東アジア学交流講座参加記」野本敬・長谷川雪子	(5)
「沖縄訪問記」禹仁秀	(6)
「沖縄大型グスク調査記」田中大喜	(6)
「随想 東京滞在記」張衛星	(8)
「随想 東京滞在記」朴玖澈	(9)
「第2回東アジア海文明フォーラム参加記」放生育王	(10)
「蔚山調査記」中村威也	(10)
「狭山池調査記」村松弘一	(11)
「2006年度運河班邗溝調査」濱川栄	(12)
「河南省北部黄河故河道調査記録」市来弘志	(12)
「コラム 三楊荘漢代集落遺跡」長谷川順二	(13)
「日本海調査記」傅林祥	(14)
「2006年夏期環日本海調査記」崔垠植・李文基	(15)
「十三湊遺跡調査記」甲斐玄洋	(17)
「多久聖廟調査記」楊偉兵	(18)
「随想 京都訪問記」張曉虹	(19)
「研究交流報告」高柳信夫	(20)
彙報	(21)
編集後記	(23)

学習院大学アジア研究教育拠点事業事務局

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1 tel: 03-3986-0221 (内線 5743)

<http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~asia-off/index.html>

ネットキャンパス開通式典

学習院大学文学部教授 鶴間和幸

(2006年9月7日 日本韓国時間16時～17時・中国時間15時～16時)

学習院大学、中国復旦大学、韓国慶北大学校の3地点を結んだネットキャンパスの開通式典は見事成功した。機器はアメリカ製のポリコムテレビ会議システム V SX700s を使用し、ラン端子に接続してインターネット回線で通信した。リモコンで通信先へのコール、カメラ移動、画像の切り替えなどの操作ができ、通信先の IP アドレスの設定を一度行えば、すぐに立ち上がって相手方をコールできる。

開通式典は福井憲彦学習院大学文学部長の開幕の辞から始まり、学習院大学学長永田良昭、慶北大学校師範大学学長黄石根、復旦大学歴史地理研究中心葛劍雄各氏の挨拶が続いた。通訳は学習院大学に日本語・韓国語間通訳(呉吉煥)、日本語・中国語間通訳(菅野恵美)の2名をつけた。中国語・韓国語間の通訳は立てず、日本語を介して中国語、韓国語に通訳した。三国をつなぐ司会は学習院大学東洋文化研究所助手の村松弘一が担当した。

東京・上海間は2000キロ、東京・大邱間は1000キロ、上海・大邱間も1000キロ、これだけ遠く離れた三箇所でも臨場感ある同時会議が出来たことはすばらしい。交通機関が発達したといっても、東京・上海間は3時間、東京・大邱間では経由する釜山の金海空港までで2時間かかる。そのほか空港までの移動時間を含めると、5、6時間は必要である。航空運賃も上海往復約9万円、釜山往復約7万円もかかる。東アジア地域間の人的交流には時間と経費の負担が大きい。テレビ会議システムは通信費無料、鮮明な画像と音声を即時に交換できる。機材と設置経費は文部科学省サイバーキャンパス整備事業、日本学術振興会アジア研究教育拠点事業、学習院情報化推進事業の助成を得た。

このネット環境をどのように活用していくのか。開通式ではネットキャンパス・ヴァーチャル・テーブルカット(三国間で画面を通じて同時にカットする)のあとに日中韓三

拠点「東アジアネットキャンパスを利用したアジア研究・教育拠点の形成へ向けて」という座談会を開いた。司会は鶴間和幸が担当した。多国間テレビ会議システムがインターネットのメールやテレビ電話(インターネット)では及ばないほどの臨場感をもたらしてくれることは一同実感した。相手の表情を見ながら双方の意志の確認を即時にできる。カメラは自由に移動し、部屋全体の隅々まで映し出すことができる。その場にいれば誰でも会議に簡単に参加できる。発言者をフルスクリーンで映せるし、ディスカッションモードにすれば画面の分割もできる。プレゼンテーション・モードではパソコンからの資料提示ができる。こうした機器を活用し、今後は学术交流やプロジェクトの会議以外にも、たとえば日中韓の三国の学生が東アジアの現状と将来をめぐって討論会を行うとか、日本語の授業を中国、韓国に向けて発信するとか様々な希望がふくらんでいく。

最後に慶北大学校社会教育学部の学部長金辰雄氏の閉会の辞で、2時間に及ぶ開通式は成功裏に終わった。三大学でそれぞれ用意していたお酒で画面を通じて乾杯し、今後の発展を誓った。当日の参加者は中国側15名、日本側29名、韓国側11名の総勢55名にも及ぶ。これだけの人々が一箇所に集合して会議を開催すれば渡航費、滞在費など経費は計り知れない。それがこれほど簡単に開催できたことは会議システムの効用である。



テレビ会議の場面(左:中国側、右:韓国側)

平成 18 年度第 1 回東アジア海文明セミナー 「海からみた文化交流の歴史—東アジア海文明を考える—」

関西大学文学部助教授 森部 豊

2006年7月22日、関西大学以文館フロンティアセンター（アジア文化交流センター）において、本事業と関西大学東西学術研究所アジア文化交流センター（文部科学省私立大学学術フロンティア推進事業）との共催による国際研究集会が開かれた。当日、74名にのぼる研究者・市民が集まったことは、「海」を通じた文化交流というテーマがきわめて現代的テーマであり、また社会の関心も高いことを雄弁に物語っているといえよう。

「海」が文化の交流を妨げる要因であるという見方は、近年様々な研究分野で見直されてきており、「海」が諸文明をつなげるものであるという認識は、むしろ一般化しつつある。

本国際研究集会では、「東アジア海」という、本事業発足と同時に新たに提出された概念を用い、その海域に面して存在する中国大陸、朝鮮半島、台湾そして日本という空

間が、どのようにむすびついていたのかという問題を設定した。この問題に対して、中国史、朝鮮史、日本史の諸領域から報告が行われ、そして各研究分野が、それぞれ一国史観にもとづくものではなく、日中交流、日台交流、日朝交流といった「東アジア海」を交流の「場」として認識し、かつ「海」によって密接にむすばれているという視点からの研究報告がなされたのである。

今後、「海」を研究テーマとする風潮はより一層高まっていくと予想されるが、そこでは学際的共同研究の必要性が容易に予想できる。今回の国際研究集会は、そのような共同研究の先駆的モデルを提供したものであり、今後ともこのようなスタイルで、最新の研究成果を社会に伝達していきたい。

*本セミナーは「関西大学東西学術研究所アジア文化交流センター」としては第4回研究集会にあたります。

【報告題目一覧】

〈基調報告〉

鶴間和幸（学習院大学教授）

「海からみた文化交流の歴史—「東アジア海文明」を考える」

〈パネル報告〉

張東翼（韓国・慶北大学校師範大学教授）

「1366年高麗国征東行中書省咨文に関する検討」

葛剣雄（中国・復旦大学歴史地理研究中心教授）

「なぜ古代中国には海外発展の原動力が欠けていたのか？—東海と地中海の果たした役割の比較」

松浦 章（関西大学文学部教授・アジア文化交流センター長）

「文政十年土佐浦戸漂着江南沙船蔣元利船」

大谷 渡（関西大学文学部教授）

「1920年代の日本のモダン文化と台湾」

〈総括討論〉

コメンテーター

李 文基 韓国・慶北大学校師範大学教授〈韓国古代史〉

禹 仁秀 韓国・慶北大学校師範大学助教授〈韓国近世史〉

鐘江宏之 学習院大学文学部助教授〈日本古代史〉

藤田高夫 関西大学文学部教授〈中国古代史〉



鶴間和幸教授の報告



総括討論

平成 18 年度第 2 回東アジア海文明セミナー 「隋唐期東アジア仏教の宗派意識」

東アジア海文明の歴史と環境プロジェクトの 2006 年度第 2 回セミナーとして、第二セクションの知識と思想の交流班では、日・韓・中の古代における交流の中心に位置していた仏教の問題をとりあげ、三国の学者で、三国の古代仏教の専門家を採用し、国際シンポジウムを開催した。

当日は、馬淵が司会を行い、まずパネラーより、三国全体にわたる枠組みの提示、日本の強烈な宗派性、新羅の宗派性の希薄さ、中国の士大夫の仏教認識と「宗」の概念の稀少さ、学派的傾向と地理的環境の関係などについて、具体的に示唆に富む報告がなされた。

ついでコメンテーターの対論及びフロアーの専門家を交えての全体討論で、「宗」とは何かについて、「禅宗」の「宗」の画期性、構成員の系譜意識や教理の独自性・継承性の重要性、自称・他称の問題、遡及的構造物と見なされ

学習院大学外国語教育研究センター教授 馬淵昌也

る点、そして三国の「宗」の大きな相違には、国家の管理の強弱が決定的であることなどを確認して終了した。参加者は 60 名にのぼり、議論は幅を持ちつつ絞り込まれる形で、充実した会になった。

特に、三国の同時期の同一テーマを、三国の当該の専門家が集中的に議論したことから、東アジア海文明の共通性と個性が従来無いほどに明瞭になったことには、東アジア海文明という概念自体の射程をも確認できたという意味で、大きな意義を認めてよいと思われる。今後も、同様の視点・手法から、継続的に東アジア海文明の各方面の様相を追求してゆきたい。

なお、本シンポジウムは、東洋文化研究所と共催し、学習院大学の国際交流基金の援助を受けた。

【日本側】

報告者：吉津宜英（駒澤大学仏教学部教授）

報告題目：「中国隋唐時代における大法の形成—教・宗・教宗—
— 一体の流れを考察して—」

報告者：新川哲雄（学習院大学文学部教授）

報告題目：「最澄における一向大乘寺の構想—宗派確立の観点から—」

【韓国側】

報告者：金天鶴（姫路獨協大学外国語学部助教授）

報告題目：「新羅下代における華嚴宗と禅宗の宗派意識」

【中国側】

報告者：陳引馳（復旦大学中文系教授）

報告題目：「中唐文人の仏教宗派意識」

報告者：張偉然（復旦大学歴史地理研究中心教授）

報告題目：「中国仏教宗派形態の差異と地域環境」

【コメント】

陳継東（武蔵野大学人間関係学部助教授）

林鳴宇（学習院大学外国語教育研究センター非常勤講師）



吉津宜英教授の報告



コメントの場面

東アジア学交流講座参加記

参加講座：第1期 禹仁秀・慶北大学校師範大学助教授

テーマ：「朝鮮時代の社会と国家」

参加期間：2006年7月18日～2006年7月20日

学習院大学大学院博士前期課程 長谷川雪子

本講座は一般の方にも公開されているため、受講者は学生だけでなく、年齢層も多岐にわたっていた。1日3時間を3日間連続で行うという、日程としてはとてもハードなものであったが、ほとんどの受講者が休まず受講しており、その熱心な受講振りにはとても驚いた。

禹先生の講義では、朝鮮王朝時代について、制度・政治から衣食住の文化にわたるまで、詳しく扱われた。私は中国史を専攻しているので、自分の専門とは違う朝鮮王朝についての講義を拝聴できるということだけでもとても勉強になることであるが、今回、日本にいただけではなかなか聞く機会のない、韓国の先生のお話を直接聞くことができたということは、とても貴重な経験であった。禹先生は韓国語で講義されたが、韓国語を理解できるか否かに関わらず、韓国史について韓国語で講義を聞くことができたということもその一つであると思う。また、通訳された李英美先生の通訳もとても丁寧で、禹先生のお話を理解しながら拝聴することができた。

私にとって貴重な3日間であったと思う。



参加講座：第2期 朱海濱・復旦大学歴史地理研究中心副教授

テーマ：「近世江南民間信仰—祭祀政策と民間信仰の変遷を中心に」

参加期間：2006年7月25日～2006年7月27日

学習院大学大学院博士後期課程 野本 敬

今回の東アジア交流講座・第二期では、中国上海・復旦大学歴史地理研究中心副教授の朱海濱先生より、近世中国の江南地域（長江下流域南部）を舞台に、従来必ずしも十分に理解されてこなかった中国の民間信仰の歴史について、王朝側祭祀政策との関わりを中心として講義が行われた。特に明代以降、王朝側は儒教的規範を民衆の信仰の領域まで貫徹させることを目指し積極的に介入していくが、そこで各地域の民間信仰は自らの存続・発展のためどのように対応したか、というのが本報告の根幹のテーマである。

例えば今日全国的信仰となっている関羽信仰も、その性格が儒教的規範と一致するため王朝側の保護を受け、一地方の信仰から発展した結果なのである。江南地域信仰の例をみると、シャーマニズム的性格を持つ周雄信仰の場合は儒教的規範に親和的なイメージの伝説を創作することで、そして地域の官僚をまつる胡則信仰では、故人を美化する様々な伝説を地元知識人が次々創作することで取締りを免れ存続・発展することとなった。しかもこれらの伝説は各地域の事情を反映して読替えや当てはめが行われ、地域的広がりの中で信仰の内実にも多様な変化が生じていった。民間信仰を支えたのは、各地域でそれを拠り所とした民衆であることは言うまでもないが、同時に王朝側の規範と地域信仰の性格を仲介し、民間信仰の諸要素を読み替え時に創作して適応させていった道士や僧侶、地元知識人の積極的な関わりの結果でもあった。

こうした中央の「理念」を地域の側が「読み替え」変形して「適用」し、更に地域間で相互参照していく過程は、理念形としての「単一ヒエラルキー」を様々に援用していく中国文化のあり方の特質をも想起させ、考えさせられるところが大きいものであった。今後もこうした学术交流の機会が持たれることを願っている。



沖縄訪問記

慶北大学校師範大学助教授 禹 仁秀
(ウ・インス)

日本の最南端に位置する沖縄は昔の琉球王国である。琉球は東アジアを中心とした中継貿易でその名声を高めた国であった。さまざまな国との交易は自然と琉球を多様な文化を持つ国にした。このたびの沖縄での学術発表と遺跡地調査の目的は、琉球の多様性を確認することにあつた。

講演会では16世紀から17世紀にかけて編纂された琉球の官撰歌謡集に北方地域の文化要素を探し求める福寛美先生の発表があつた。この発表は琉球が残した最初の文字資料を対象として、神話や信仰の観点で北方、とくに朝鮮半島からの文化流入の様相を明らかにしようとした点でかなり有意義な発表であつた。その中で福先生は琉球の支配者に属した人物を扱いながら「沙道」という用語について非常に多様で真摯なアプローチをした。この言葉は、朝鮮で使用されたものと意味と発音がともに似ていたが、朝鮮では「使道」と書いて「サット」と発音し、地方の守令を呼ぶときに使う呼称として使用された。私はこのことを福先生に伝えることができた。それから、ともに参席した張東翼教授は韓国の済州島の三姓神話に立脚し、発表者が参考とすべき価値ある助言をした。このようなことは韓国人だけが指摘できるものであつた。韓日学者が一緒に参加する共同セミナーの効用性を十分に確認することができた有益な場であつた。

翌日にはグスクと呼ばれる琉球の城郭を調査する貴重な機会があつたが、数年前に日本の近世の城郭を調査した私にとっては、非常に期待の大きいものであつた。保存状態が比較的良好な中城城、勝連城、座喜味城跡などを見たが、私の狭い所見でもやはりさまざまな国の様式が混ざっているように感じられた。城をいくつかの区域に分けたのは三の丸、二の丸、本丸に区画した日本式城郭築造法と似ていた。高い石垣の断面の線は日本の城郭と似ているが、若干の差異を感じられた。城門の形態は朝鮮や中国の影響を受けているように感じられた。とくに浦添城跡から出土して展示されていた「癸酉年高麗瓦匠造」という銘文が刻まれた高麗系の瓦は、われわれ一行の大きな関心と視線を引いた。このような文化の交流と混合は首里城正殿の外観からも感じられた。正殿の正面中央の唐破風には日本特有の曲線が見られ、屋根の形や軒の線には韓国と同様の線が見られ、華麗な龍文様の配置と色彩には中国の風情が感じられた。

韓国との交流の足跡についての確認で、夕方の会食の場は盛り上がった。琉球大学の山里純一教授とその学生一行と同席して、韓国語と類似した言葉が琉球語に残っていることを確認することができた。母に対する呼称が琉球語では「アンマー」であるが、これは韓国語の「オンマー」と発音が似ている。祖母に対する呼称が琉球語では「ハメ」というが、これもまた韓国語の「ハルメ」とほぼ一致する。さらに父に対する呼称である琉球語「アッパ」は韓国語の「アッパ」と完全に一致するのである。同様の要素の確認という驚きだけでも楽しい場でした。このような貴重な経験をすることができる機会を提供して下さった学習院大学の鶴間和幸教授をはじめとする皆様に感謝いたします。
(翻訳：鳥暁彦)

* 本稿は2006年3月17日～19日に沖縄で実施された第3回東アジア海文明フォーラム(会場：琉球大学、報告者：福寛美)とグスク調査に関して寄せていただいた原稿です。

沖縄大型グスク調査記

駒場東邦中・高等学校教諭 田中大喜

本調査記は、第3回東アジア海文明フォーラム(2006年3月17日～19日)の一環として行われたグスク調査(3月18日に実施)の概容である。

調査対象となったグスクは、中城・勝連城・座喜味城・浦添城の4つのグスクだったが、これらは中山王権の中核部を構成したグスクと位置づけられる。というのも、①中城・座喜味城は中山王尚泰久(第一尚氏5代目)の舅護佐丸の居城、②勝連城は尚泰久の婿阿摩和利の居城、③浦添城は首里城に移るまでの中山王の居城、だからである。

1 グスク研究の到達点

各グスクの個別調査の概容を記す前に、グスク研究の到達点を確認しておきたい。

近年のグスク研究をリードされている安里進氏の研究(安里進2003)によると、13世紀を画期として、大型化・複郭化・定型化を達成した大型グスクが出現するという。これは、面積が概ね2000m²以上で複数の郭から構成され、その中核的施設として正殿と御庭という大型建物とこれに相対する広場があり、その他に聖域や倉庫などを備えた、内部構造的に定型化した城塞的グスクとされる。このような特徴を持つグスクは13世紀に現れ、それ以前のグスクとは明確に区別されるという。

また、大型グスクの居住者は、大型建物に居住する首長と生産労働に従事する2、3家族で構成された世帯共同体であり、大型グスクは集落から分離された城主＝領主の居館として存在したという。今回の調査対象となったグスクは、いずれも13世紀以降に建てられたことが確認されていることから、大型グスクに分類される。本調査記のタイトルを「沖縄大型グスク調査記」とするゆえんである。

2 調査の概要

各グスクの調査概容は、以下の通りである（当日の調査順に記す）。なお、適宜先行研究の成果（名嘉正八郎1995・岡田輝雄2000・安里進2003・下地安広2004）を踏まえて記してあることを断っておく。

①中城

麓に屋宜港を抱えた、標高160～165mの琉球石灰岩段丘上に立地している。沖縄本島のグスクでは3番目に標高が高い。西の郭（広場）・南の郭（聖域）・一の郭・二の郭・三の郭・北の郭から成る6連郭の構造となっているが、三の郭・北の郭の城壁とそれ以外の郭の城壁とでは積み方に違いが見られる。すなわち、前者は亀甲乱れ積みと呼ばれる相方積みに対し、後者はレンガを積み上げたような布積みで、前者の積み方は座喜味城の城壁と同じである。従って、後者の範囲がもともとの中城で、前者の範囲が座喜味城から移ってきた護佐丸による拡張部分と見られる。

一の郭には基壇建築物（殿舎跡）があったが、瓦は出土していない。従って、板葺きの建築物があったと見られる。

②勝連城

麓に屋慶名港・照間港を抱えた、勝連半島の付け根近くの標高約80～100mの岩山に立地している。一の郭～五の郭から成る5連郭の構造となっているが、一～三の郭と五の郭は標高が高く、中央の四の郭は低くなっている。四の郭の南側に正門と見られる「南風原御門」があったという。なお、四・五の郭は未復元であり、また大正期までは山を縁取って巡る城壁が残されていたというが、現在は取り壊されている。

三の郭は二の郭の前庭として機能していたと見られ、祭祀が営まれた場所と想定されている。三の郭の入り口には木造の楼門が建っていたと見られ、礎石が残っている。二の郭には基壇建築物（殿舎跡）があり、正殿と見られる。最上部の一の郭からは、大量の大和系古瓦が出土（高麗系瓦も混在）したことから、瓦葺きの建物が存在したことが判明する。

瓦葺きの殿舎があったのは、勝連城の他には首里城と浦

添城のみであることから、勝連按司が中山王と互角の勢力だったことが窺える。一の郭には「王ノミウヂ」と称される丸い霊石があり、これが瓦葺き建物の礎石と見られる。なお、一の郭の入り口には石造のアーチ門があったようで、石屋根の一部が残る。

③座喜味城

麓に長浜港を抱えた、標高127mの国頭マージと呼ばれる赤土で出来た台地上に立地している。標高は首里城とほぼ同じである。外郭と内郭から成る2連郭の構造となっており、今回調査したグスクの中では最も規模が小さい。しかし、外郭・内郭ともに見事な曲線構造で、かつかなりの厚みのある城壁が巡らされており印象深い（城壁面積は城郭全面積の半分を占めるといえる）。これは、座喜味城が国頭マージという赤土の台地に築かれているため、城壁が崩れないようにするための仕組みと見られている。

座喜味城は15世紀前半に護佐丸によって築城されたと伝えられているが、注目すべきは、護佐丸の築城以前に前提（原形）となるグスクがなかったという点である。すなわち、座喜味城は軍事的性格に特化したグスクといえ、15世紀前半時での琉球の石造建築技術の粋を伝える貴重な遺跡といえる。

内郭には基壇建築物（殿舎跡）があったが、瓦は出土していないため、板葺きの建物があったと見られる。なお、基壇前には道光23年（1843）3月吉日付の座喜味親方が寄進した石碑が建てられている。座喜味親方＝毛恒達は、道光22年に江戸に派遣された慶賀使の副使を務めたことが確認できる（横山學1987）。毛氏は護佐丸の子孫という伝承を持つ氏族であることを鑑みると、この石碑は座喜味親方が慶賀使の副使となったことを記念するべく、先祖縁の地である座喜味城に建てたものといえようか。

④浦添城

麓に牧港を抱えた、標高120～140mの琉球石灰岩段丘上に立地している。浦添城はアジア・太平洋戦争の際に日本軍の司令部が置かれたため、その多くが戦災によって破壊されたことにより、今回往事を伝える建築物はほとんど確認できなかった。しかし、近年発掘が進められその全容が解明されつつあるが、それは古琉球史を大きく塗り替えるほどの成果をあげていることは、大いに注目される。その詳細については、先行研究（安里進2003・下地安広2004）を参照されたい。

3 沖縄大型グスクの特色

—戦国期「日本」城郭との比較から—

大型グスクは、三山対立という戦乱の時代に対応した城塞的グスクとされる。そこで最後に、同じ戦乱の時代に建てられた戦国期の日本列島本土の城郭と比較して、その特色について省察したい。

今回全容が確認できなかった浦添城を除くと、中城・勝連城・座喜味城はいずれも並列的な構造で、ほぼ直線上に郭が連結するという特徴を持つ。高い城壁・堀を巡らしてあるものの、中核施設のある一の郭までの道筋は極めて単純といえる。また、郭の出入り口（虎口）の防御施設があまり発達していないことも大きな特徴と思われる。一方、戦国期の日本列島本土の城郭は、郭と郭の間の通路を複雑かつ細くしたり、虎口は枳形にして敵の侵入を阻む工夫が施されるなど、はるかに高度な防御機能を持つ。このように両者を比較すると、沖縄の大型グスクは城塞的グスクというものの、防御機能が未成熟との感が否めない。大型グスクが高度な技術による石垣で囲まれ、また高所に築かれていることを重視するならば、大型グスクとは軍事的側面よりも、むしろ周囲に「見せる」という側面を意識した城郭だったといえるのではなかろうか。

戦国期「日本」城郭の到達点に位置づけられている安土

城は、城内部へと入る大手道が天守へ向かって直線的に設定されるという構造を有し、また城全体が石垣で覆われ、その上に金箔が葺かれた瓦葺きの建物が建てられたが、これはまさに天下人の威信を周囲に「見せる」ことを意識したと造りといわれている（千田嘉博・小島道裕 2002）。安易な比較は慎まねばならないが、沖縄大型グスクの構造は、戦国期「日本」の最終段階の城郭を彷彿とさせるのである。

〔参考文献〕

- 安里進「琉球王国の形成と東アジア」（豊見山和行編『日本の時代史 18 琉球・沖縄史の世界』吉川弘文館、2003年）
- 下地安広「浦添グスクと周辺遺跡」（沖縄県今帰仁村教育委員会編『グスク文化を考える』新人物往来社、2004年）
- 千田嘉博・小島道裕編『天下統一と城』（塙書房、2002年）
- 名嘉正八郎『南日本文化研究所叢書 20 グスク（城）の姿』（鹿児島短期大学附属南日本文化研究所、1995年）
- 横山學『琉球国使節渡来の研究』（吉川弘文館、1987年）
- 『世界遺産 グスク紀行』（琉球新報社、2000年、岡田輝雄執筆）

随 想

東京滞在記

秦始皇兵马俑博物館 張衛星

中国秦漢史および秦始皇帝陵の著名な研究者である鶴間和幸教授のもとで研究すべく、2006年3月1日から14日までの間、私は学習院大学の客員研究員として、東京において二週間にわたり研究を進めた。この期間、学習院大学史学科・東洋文化研究所、そして日本学術界の先生方や友人たちの助けにより、私は多くの収穫を得ることができた。今この期間に得たものを皆さんと一緒に分かち合いたいと思う。

3月1日、午後8時になると雨が降ってきた。入国手続きが終わった時には、予定よりも一時間遅れ、すでに学習院大学の村松氏が空港の出口で待っていた。私たちはスカイライナーと電車を乗り継ぎ、夜10時ごろ、私の東京での仮住まい—学習院大学のゲストハウスに到着した。

3月2日、鶴間教授が大学史学科の事務員に私を引き合わせ、午後の講演会の準備をした。午後、東亜大学の黄曉芬教授が到着した。彼女は講演会の通訳を依頼されていた。

4時、私は『秦始皇陵陪葬坑研究』の講演報告を始めた。

会場内は学習院大学の研究者のみならず、わざわざ講演を聞きに来てくれた愛好者もあり、私は大変感動した。講演後、聴衆とともに秦始皇帝陵研究に関する交流を深めた。夜、文学部主催の歓迎会で、多くの新たな友人と知り合うことができた。

3月3日、午後、中国新疆自治区のイディリス氏による小河墓地の講演会に参加し、夜は懇親会をともにした。

3月8日—10日、学習院大学の青木・中西両氏とともに福岡へ行き、九州大学を訪問し、九州国立博物館・太宰府・鴻臚館・福岡市博物館などを見学し、宮本一夫氏や陳洪女史など、中国考古学の研究者と会った。10日の夜、東京に戻り、学習院大学史学科学生の卒業祝賀会に参加した。

13日、大川女史の同行により、佐倉の国立歴史民俗博物館へ行き、日本の古墳時代の甲冑や埴輪を見学し、考古部の上野祥史・杉山晋作氏と交流した。夜は鶴間教授や村松氏など学習院大学の諸氏と送別会をともにした。

14日早朝、下田誠氏が私を空港まで送り、11時に東京に別れを告げ、帰国した。（翻訳：青木俊介）

東京滞在記

慶北大学校非常勤講師 朴 玖 澈
(パク・クチョル)

私はこのたび初めて日本最大の都市であり首都である東京、そして学習院大学を訪問することになりました。3月11日（土）から19日（日）までの9日間という短い期間でしたが、私にとっては多くのことを学ぶ良い機会になりました。

数年前、京都での留学を終えて帰国した後、私の頭の中に残っている日本へのイメージは関西地方に関するものに限られていました。日本留学の期間中にはめったに東京を訪問をする機会に恵まれなかったからです。3月9日、12時10分頃に金海空港を離陸した大韓航空機は1時間40分後の1時50分頃に成田空港に到着しました。空港では学習院大学文学部の下田誠氏が出迎え、温かく歓迎してくださいました。訪問初日の夕方には、学習院大学史学科大学院生の皆様が用意してくださった歓迎会によって、楽しい一日を送ることができました。以下、このたびの訪問期間中の学術活動について簡単に言及いたします。

3月15日には学習院大学史学科で午後1時頃から、私がこれまで研究してきた論文を紹介する機会をいただきました。そこで私が修士課程からこれまで中国の西南地域である四川について研究をしてきて、特に辛亥革命期の四川における知識人層の動向について注目してきたということを中心にお話しさせていただきました。私の紹介が終わった後、討論の場で学習院大学史学科には私のように西南地域について関心のある研究者も一部いるということを確認することができ、同一地域についての関心を共通項として導き出すことができたのは嬉しいことでした。同日、夕方5時頃からは、「東アジア海文明の歴史と環境」プロジェクトのメンバーである長谷川順二氏と菅野恵美氏の発表が



勝連城にて

ありました。学習院大学で進行中の研究過程の一部を直接聞くことができる貴重な機会となり、興味をもって拝聴いたしました。長谷川氏は「前漢期黄河故河道復元―内黄県三楊荘遺跡と前漢黄河の関連―」というテーマで、菅野氏は「黄河下流域の空間への視点」というテーマでした。発表内容は私の専攻する分野とは時代も地域もかけはなれていて、内容を明確に理解することは難しかったのですが、問題意識が明らかで、研究も大変緻密に進められているという印象を受けました。特に韓国では中国古代史専攻の研究者があまり多くないのが実情ですが、学習院大学史学科では中国古代史を専攻する研究者が多く、研究範囲も多岐にわたるということを知りました。

3月17・18日の両日には沖縄を訪問する機会がありました。3月17日9時に羽田空港から出発して、12時に那覇空港に到着し、そののち琉球大学を訪問いたしました。午後、琉球大学での東アジア海文明フォーラムにおいて福寛美氏の「『おもろそうし』に見える北方的文化要素」というテーマで発表がありました。『おもろそうし』は琉球王国の歌謡集として文学的性格を持っていると見られますが、福先生はこのような文学作品を通して北方的な文化要素を見つけ出すのに成功していると思われました。

3月18日には沖縄の史跡である斎場御嶽・勝連城・中城・座喜味城跡を訪問しましたが、日程の都合上、他の韓国の研究者たちより一日早く東京に帰らざるを得なかったのは残念なことです。

歴史と伝統を誇る学習院大学を訪問することができたのは幸いなことだったと思います。このたび学習院大学に滞在した間、鶴間和幸教授・武内房司教授、そして学習院大学大学院生などから温かい歓迎を受けたことに、心より感謝を申し上げます。このたびの訪問を通じて、東アジア文化の理解のためにはより幅広い相互交流が必要だということを感じながら帰途につきました。ありがとうございます。(翻訳：島暁彦)



第3回東アジア海文明フォーラム

第2回東アジア海文明フォーラム参加記

学習院大学大学院博士後期課程 放 生育 王

2005年3月3日(金)16:00より、学習院大学・西2号館301教室にて、第2回東アジア海文明フォーラム「楼蘭と東アジア海文明」が開催された。当日は、新疆文物考古研究所所長のイディリス・アブドゥラスル(伊第利斯・阿不都熱蘇勒)氏が、「東アジアにムギをもたらした人びと～小河墓地の発掘～」という題目で講演し、NHKエグゼグティブプロデューサー・総合地球環境学研究所客員教授の井上隆史氏が、それにコメントする形式であった。なお、通訳は、東亜大学総合人間・文化学部教授の黄曉芬氏であった。当日は、学内・学外より、大変多くの方が聴講し、大盛況であった。

講演の主な内容は、イディリス氏が携わった、2002～05年までの小河墓遺跡発掘調査に関するものであった。膨大な写真資料を駆使した講演で、視覚的に理解しやすいものであった。とくに、ミイラや墓前の木製品(コヨウやタマリクス)でできており、その形態から、男性墓か女性墓

か判断できる)の写真は、何度も登場し、みるものに強い印象を与えたといえる。

また、講演内容と東アジア海文明とのかかわりでいえば、次の点に注目できた。すなわち、ミイラの腰付近から、草で編まれたかごが見つかり、その中から小麦が発見されたことである。井上氏のコメントによれば、小河墓遺跡の存在は、黄河流域における小麦の栽培より、千年近くも前のことであり、この点をふまえると、小河墓遺跡に眠る人々(ミイラ)が、黄河流域に小麦を伝えた可能性を推測されるという。ことは、小河墓遺跡と黄河流域にとどまらず、ユーラシア大陸の東西における小麦の伝播を考える、大きなキーワードにまで発展するのである。

今回の講演では、「地域(=小河墓遺跡)から全体(=ユーラシア大陸における小麦の伝播)をみる」という、新たな視点を学ぶことができた。大変有意義な講演であったことを記して、筆をおくこととする。

蔚山調査記

学習院大学非常勤講師 中村 威也

2006年3月26日に蔚山地域の調査に参加させていただき、慶北大学校側のコーディネイトにより、蔚山地域の2つの倭城跡(西生浦倭城・蔚山倭城)、長生浦クジラ博物館、塩浦を調査、見学した。参加者は学習院大学鶴間和幸教授、慶北大学の李文基教授をはじめとする日韓総勢二十数名であった。以下、各地点での調査活動の概要を記す。なお慶北大学校に用意して頂いた「蔚山地域踏査—交流と葛藤の痕跡を求めて—」という冊子が非常に役にたった。

西生浦倭城は、文禄2(1593)年に加藤清正が築城したもので、現在見られる倭城の中でもっとも石垣などの城址が残っている。蔚山市案内士・金福子女史の説明によれば、これらの石垣はより北に位置していた朝鮮の城のものを利用したはずだが、数量的にそれだけでは足りず、石垣の由来など謎が多く、日本の研究者の協力を仰ぎたいとのことであった。最上部(西端)には天守台、東端には船着場跡

があり、水面・水路に面した東端部分と籠城もできる西端の天守台部分という構造と機能がよく理解できた。

蔚山倭城は、海岸より太和江に10kmほど内陸に遡った、東川と太和江の分岐付近の50mほどの高台に位置している。現在は公園となっており石垣は部分的にしか残っていない。ここでも、東川という河川と三の丸が隣接していて、水路を確保していた点と自然の高台を利用した城の構造がわかった。

長生浦クジラ博物館には、蔚山市街地の西、太和江の上流の盤亀台で発見された岩刻画のレプリカが展示されており、そこには数種のクジラ類の捕鯨やその他の陸上動物の狩猟の姿が多く見える。岩刻画は3000年～2500年前のもので、当時は盤亀台付近まで海に面していたことが分かり、自然環境の歴史を踏まえる必要性を感じた。

塩浦は、1420年代ころより交易などで往来していた日

本人が恒常的に港町に居住し形成した、居留地である「倭館」があったところである。塩浦倭館には1494年には51戸152人の日本人が住んでいた。倭館が存在していた一帯は、現代自動車工場の敷地内であったので、近くの記念碑周辺を見学したにとどまった。蔚山市街から湾を隔てた南岸に位置し、海沿いの港町のはずれに倭館が位置していたことが理解できた。

今回の蔚山調査を通して、蔚山は、内陸にはいったところにあるが、様々な面において海洋世界と密接な関係を有していることが認識できた。



狭山池調査記

学習院大学東洋文化研究所助手 村松 弘一

7月23日、関西大学でのシンポジウムの翌日。私たち日中韓の研究者13人は河内平野の二つの遺跡を訪問した。目的地は難波宮跡に2004年に建設された大阪歴史博物館と2001年にオープンした大阪府立狭山池博物館である。河内平野の都市遺跡と溜め池をめぐることで、中国・朝鮮半島から東アジア海文明を受け入れた日本側の港・都市・農業技術の歴史と環境を考える契機としたいと考えた。

難波宮跡は上町台地が北にせり出した北端、大阪城の西南に位置する。難波宮が都として機能した時期は白雉2(651)年～朱鳥元年(686)年と神亀3年(726)年～延暦12年(793)年の二期にわけられる。この地が都であったのは当該所が5世紀後半から難波津とよばれる港であったからにはかならない。難波宮跡からは百済土器や新羅土器などが発見され、海港と都市が一体化した難波宮のすがたが思い起こされる。

この難波宮の後背地である河内平野の灌漑の中心的な水利施設が狭山池である。狭山池は日本最古のダム式のため池である。南河内の池溝開発が積極的にすすめられた7世紀前半の616年ごろ誕生し、その後は行基や重源さらには片桐且元・小堀遠州らによって改修され、現在も利用されている。この池の東アジア古代史上の意義はその堤が敷設工法(草土法)とよばれる草と土を段階的に積み上げる方法を採用していることである。この形式の池は韓国では百済の碧骨堤や新羅の菁堤、中国では安豊塘(芍陂)などに見られる。これらの技術の伝達は中国大陸―朝鮮半島―日

本列島の文化交流(仏僧が仲介役?)という視点でも重要である。また、今回訪問した難波宮と狭山池を7世紀における海港都市とその後背地の農業開発と見ることも可能である。今後は中国・朝鮮半島における海港都市の建設と陂池を中心とした農地開発についての現地調査もおこないたい。

※大阪府立狭山池博物館では学芸員の有井宏子氏の解説をいただき、また、大阪府教育委員会の小山田宏一氏からは狭山池関係の論文をいただきました。両氏に深く感謝いたします。

※今回の調査の参加者は以下の研究者である。張東翼・李文基・禹仁秀・兪敬兒(韓国)、葛劍雄(中国)、鶴間・鐘江・浜川・市来・菅野・福島・放生・村松(日本)。



2006年度運河班邗溝調査記

共立女子大学非常勤講師 濱川 栄

運河班は7月28日(金)～8月4日(金)、揚州・高郵・淮安の現地調査を行った。目的は、文献に見える中国最古の運河・邗溝(揚州～淮安に建造)と東アジア海文明の関係を探ることであり、最大の課題は邗溝が基礎となった現「京杭大運河」(以下「大運河」)の航行であった。

揚州市の調査では、まず市内西北の蜀崗区一帯(大明寺、栖霞塔、鑑真記念堂などがある)を参観した。揚州市は海拔10m前後の低平地にあるが、海拔30～40mの蜀崗は唯一の高台で、春秋時代の前5世紀前半に呉王夫差が邗城を築いて以来、宋代まで城郭が置かれた。特に高さ70mの栖霞塔からは市内が一望でき、「東方大平原」(黄淮海平原)の広大さが実感できる。

蜀崗の南東部から幅約10m、長さ3kmの「古邗溝」が東に伸び、「大運河」に通じている。しかし、邗溝の揚州以北の渠道は「大運河」と同一ではなく、やや東北行して今はない射陽湖等多くの湖沼を連結して淮河に達していた。そのさい、湖沼群の連結のためにすでに閘門等の水利施設を備えていた可能性もある。旧射陽湖一帯の調査は今後の課題である。

長江・淮河を経て黄海に通じる邗溝は、6世紀、隋代の改修で「大運河」の一部となり、東アジア海文明の形成に重要な役割を果たした。唐代、鑑真(揚州出身)・円仁など多数の僧侶や遣唐使が頻繁に航行した事実からもそれは首肯できる。

一部でも揚州淮安間の「大運河」を航行するのが今回の最大の目的であり、また最大の難関でもあった。なぜなら、現在揚州付近の「大運河」には客船がなく、貨物船などに乗せてもらう以外ないからである。揚州市内ではそうした交渉はできず、計画は頓挫するかに思われた。しかし、揚州北郊の邵伯に移動し、渡し船の船頭に相談すると、快く小汽船を手配してくれた。その結果、高郵市まで約36km、2時間半の航行が実現したのである。「大運河」の水深は最大8m、幅は最大300mあり、予想以上の規模であった。頻繁に往来する貨物船の積み荷は、多くが華北で産出する石炭らしい。上海港などから輸出されるものであろう。「大運河」は今も中国と海外をつなぐ重要なパイプなのである。中国でも忘れられかけているこの事実を体感できたことが今回の調査の最大の成果であった。

しかし、淮安以北の「大運河」は荒廃が著しいと聞く。次年度以降はそうした地域を調査し、「大運河」のマイナス面についても考察を深めていきたい。



河南省北部黄河故河道調査記録

学習院大学非常勤講師 市来弘志

黄河は歴史上頻繁に洪水を起こし、時代によってその河道を大きく変えている。衛星写真画像と現地調査に基づく黄河故河道の復元研究は、我々がかなり以前から取り組んでいる課題である。昨年・一作年と、河南省濮陽市～河北省大名県・館陶県付近の調査を行った。本調査はこれらの調査に続くものである。東アジア海文明を解明する上でも、渤海黄海沿岸の後背地である黄河下流域を研究することは意義深い。今回は9月2日から7日まで、河南省北部における前漢期黄河に関連する遺跡を参観した。参加したのは鶴間和幸学習院大学教授、学習院大学大学院博士後課程の長谷川順二氏、および市来である。

9月2日に我々は上海から河南省鄭州市に入り、中国側の現地調査協力者である胡雲生氏(復旦大学博士卒業。鄭州在住)と王大学氏(復旦大学博士課程)、及び今回特にご協力をお願いした塩澤裕仁氏(法政大学助教授・洛陽外国語大学客員教授)、宇都宮美生氏(洛陽大学講師)と共に河南省博物院を見学し、河南省各地の貴重な文物を間近に見ることができた。

3日に我々は中国のボンベイと言われる三楊荘遺跡を参観するため内黄県に入った(コラム参照)。その後、隣の浚県に移動して枋頭城跡を見学した。枋頭は曹操がここに水門を築いて運河を通して以来交通の要衝となり、魏晉南北朝時代にたびたびこの地をめぐる大きな戦いが起きて

いる。現在は枋城村として地名だけが残り、村の裏には河（淇河）が流れていた。文献によれば枋頭城の近くで淇河が前漢黄河と交わるという。この地形を確認出来たのは収穫であった。

4日は汲県古城を見学する。汲県古城は春秋時代以来北斉まで黄河のほとりにあった城で、黄河故道を知る重要な手がかりとなる。城は何度も洪水で流されて地下に埋まっているが、地元の人の話では、高さ3~4メートルの盛土部（現在では畑への道路として使われている）がかつての城壁の残存部分だという。確かに遺構の可能性は十分にある。

5日は延津県の文物局長にご案内頂き、この地域の黄河故道を参観する。延津県では黄河故道一帯を自然保護区に指定し、「黄河故道森林公園」などの施設を設置する等、積極的に保護を行っている。保護区内では15000ヘクタールの広大な保護区に木を植え、また落花生などの砂地に強い植物を植えている。土地の条件をうまく利用した方法には大変感心した。またここには漢代以来、黄河によって形成された自然堤防である太行堤があった。しかし現在は各地で高速道路建設のために破壊されているという。特に我々の見た地点では堤の中央部分がざっくりと削られるというひどい状況だった（写真）。誠に残念である。

6日は午前中に原陽県で漢代の巻県故城があった地点を参観し、清・康熙年間の洪水に関する石碑を見た。この石碑は地面に埋まっていたのだが、現地の方々わざわざ掘りだして下さったものである。その後洛陽に到着し周代の

天子車馬坑である天子駕六博物館を見学した。

7日は塩沢氏にご案内頂き、隋唐洛陽城及び漢魏洛陽城とその周辺の重要遺跡を参観した。参観したのは北魏孝荘帝陵、則天武后期上清宫遺跡（則天武后が洛陽に奠都した際営んだ宮殿跡）、唐代上窯遺跡（唐代の官窯遺跡）、隋代回洛倉遺跡（東方から水運で運ばれた食料を貯蔵する大倉庫跡。隋末の内乱時に係争の地となる）、北魏洛陽城外郭、北魏洛陽城張分溝遺跡（北魏洛陽城の壕）、北魏洛陽城内城壁、北魏宮殿基台（近年調査された。畑の中にわずかに基壇が残存）、金庸城遺跡（曹魏期に洛陽城西北隅に築かれた要塞。鄴三台に倣ったとされ、堅固な城壁の一部が今でもよく保存されている）である。午前中のみの見学だったが、極めて有意義であった。

今回は各地で貴重な遺跡や地勢を参観する機会を得た。今後の黄河下流研究に資する所は大きいと言える。



太行堤（河南省原陽県）

コラム 三楊荘漢代集落遺跡

2005年の中国十大考古新発見にも選ばれた、漢代の集落遺跡。大都市の一部ではなく独立した漢代の集落遺跡というのは未だ数が少ない。さらに洪水（黄河の氾濫と考えられる）によって一瞬にして土砂に埋没したため、当時の状況がほぼ残っているという意味でも貴重な遺跡である。埋没状況が似通っているためイタリアのポンペイ遺跡と比較され、「中国のポンペイ」とも称される。ここからは住居遺跡の他、陶器や瓦・鉄器などの日用品、さらに新・王莽期の貨幣である「貨泉」が出土している。

遺跡の位置する河南省内黄県にはかつて黄河が流れていた箇所であり、黄河由来とされる帯状の沙地がいくつか存在する（この沙地は宋代の河道と考えられる）。三楊荘遺跡はまさにこの沙地の脇に位置し、我々が復元した河道（前漢河道）の北側に位置する。また河川決壊で村全体が土で埋没するというのは考えにくい、「濁河」と呼ばれ抜群の土砂含有量を誇る黄河であれば、決壊した際に土砂をかぶってそのまま埋没するという状況も想定できる。黄河は前漢末から後漢初期までは氾濫を繰り返し、特にこの河南・河北の省境付近で頻繁に決壊を起こしたという。前漢期に黄河がこの付近から北側に向けて決壊したという文献記録も存在するので、黄河の決壊により埋没したのは間違いのないだろう。

三楊荘遺跡の近く（約500m）に「二帝陵」という場所がある（現地政府はこの二つの遺跡をセットにして観光地化するようだ）。神話時代の皇帝である「帝顓頊」と「帝嚳」を祀る遺跡である。現在の墳丘や額は元代のものだが、一説には漢代から存在したという。二つの位置関係から見ると単なる集落ではなく、漢代に二帝陵の管理処として設置された建物という可能性も考えられる。（学習院大学大学院博士後期課程 長谷川順二）

日本海調査参加記

復旦大学歴史地理研究中心副教授 傅 林 祥

2006年8月8日～11日の期間、筆者と張曉虹副教授は日本の学習院大学の組織する“東アジア海文明の歴史と環境”の史跡調査に参加した。本調査は日本・韓国・中国の学者が共同に参加するものであった。調査地は、日本列島の本州北端、青森県津軽地方と北海道渡島半島の一帯である。調査の重点は、弥生時代、縄文時代の考古遺跡及び関連する史跡の博物館、資料館などである。

8月8日午後の調査は青森湾の南側に位置する三内丸山遺跡である。この遺跡は縄文時代前期・中期（約5500年前～4000年前）の大集落と平安時代（約1000年前）の集落を主とする。最も印象的であったのは、大型竪穴建築と大きな支柱の跡であり、大きな支柱は直径約1メートル、樹木は直径約2メートルの柱穴の中で、間隔は約4.2メートル、当時の穴居建築の規模を見ることができる。

8月9日午前の調査は、青森県南津軽郡田舎館村東部の垂柳遺跡である。およそ弥生時代の中期（紀元前後）、ここは水稲田であり、当時、本州最北端の水稲産地であった。水田・水溝遺跡は眼前に迫り、水田の修繕はかなり行き届いていて、溝の方向は十分に地形の変化を考慮したものだった。一枚の水田の中には多くの足跡があって、かなり密集して、深さは一様でない。しかしこの一区域のほか、足跡はとても少ない。この区域は当時の人々の臨時的な公共の活動場所だろうか。それとも災害時、人々が逃げる時に残したものか。このことは後人には解きがたき謎といえるかもしれない。午前は大屋敷館遺跡、中泊町博物館を参観

した。午後は十三湊遺跡（今の十三湖一带）・市浦歴史民俗資料館・旧十三小学校内に設けられた遺物整理室、唐川城展望台、福島城の遺跡などを参観した。十三湊は中世日本北部の重要な港であった。

8月10日、正午に北海道西南部函館に到着した。中国唐代の史籍は北海道を“蝦夷”と呼んだ。明治初年、北海道と称して、11州に分け、その後また行政管理系統を庁・支庁と改める。午後、市立函館博物館・函館北方民族資料館などを参観する。北方民族資料館内の古代衣服の陳列は最もすばらしく、その土地の人々が自分たちで制作した衣服であった。草皮衣・樹皮衣や、また精密な刺繍の衣服もあり、生地 の 図案と服装のデザインは、ともに強烈な地方的特色を持っていた。陳列の衣服中、交易を通して取得した清朝の官服と日本の服装もあり、史料の記録と結び付けると、古代中国の文化と日本の文化がともに“蝦夷”に影響を与えたことを説明している。

8月11日午前、上ノ国の勝山館遺跡を参観する。勝山館は北に日本海、東に天の川の夷王山麓という土地に位置し、およそ550年前に建てられた。沿道では、相前後して夷王山墳墓群・貝塚・用水施設・集落などの遺跡を見ることができた。勝山館は見晴らしのきく有利な地勢を占めていて、当時の日本海沿岸の軍事と貿易の要衝であった。

筆者はかつて《中華大典・歴史地理典・域外分典》の編纂作業にあたり、古代日本についておよそ理解していたが、それは文献上に留まり、実際的な理解に欠いていた。このたびの調査を通して、古代日本の歴史に対して、さらなる理解を得られた。（翻訳：下田誠）

*傅林祥氏・李文基氏・甲斐玄洋氏の原稿はセクションⅡ・交流ネットワーク班（班長：鐘江宏之）の企画した2006年度日本海調査に関する調査記です。



市浦村歴史民俗資料館にて



勝山館にて

2006年夏期環日本海調査記

大邱心印高等学校教諭 **崔 垠 植**
(チェ・ウンシク)
慶北大学校師範大学教授 **李 文 基**
(イ・ムンギ)

I、はじめに

日本学術振興会アジア研究教育拠点事業「東アジア海文明の歴史と環境」の研究の一環として、青森県及び北海道函館市周辺地域にある、古代、中世の文化と交流に関する遺跡を調査した。プロジェクト内のセクションII「東アジア海文明のネットワークと環境」交流ネットワーク班の、綿密な計画に沿って進められた、極めて充実した実地調査となった。以下はその概要である。

・調査地域：青森県青森市、弘前市とその近郊地域、

北海道函館市とその近郊地域

(三内丸山遺跡、垂柳遺跡、高屋敷館遺跡、中里城跡、十三湊遺跡、唐川城跡、福島城跡、勝山館跡、志答館跡等)

・参加者 (17名)

【慶北大学校】張東翼、李文基、禹仁秀、崔垠植 (4名)

【復旦大学】張曉虹、傅林祥、呂静 (3名)

【学習院大学】鐘江宏之、家永遵嗣、鶴間和幸、馬瀨昌也、下田誠、牧飛鳥、大多和朋子、小宮山嘉浩、甲斐玄洋、近藤祐介 (10名)

・調査日程

【1日目 8月8日火曜】

目白駅集合 (7:30) →大宮駅着 (8:40) →大宮駅発 (8:54) →八戸駅着 (11:31) →八戸駅発 (11:38) →青森駅着 (12:32) →昼食 (12:40) →三内丸山遺跡 (14:20～15:30) →青森駅発 (16:45) →弘前駅着 (17:19) →夕食

【2日目 8月9日水曜】

田舎館村埋蔵文化財センター (9:20～9:50) →高屋敷館遺跡 (10:20～10:50) →中泊町博物館 (11:50～12:20) →昼食→市浦歴史民俗資料館 (14:00～14:50) →十三湊遺跡及び遺物整理室 (15:00～16:00) →唐川城展望台 (16:15～16:30) →福島城跡 (16:45～17:15) →夕食

【3日目 8月10日木曜】

弘前駅発 (9:09) →青森駅着 (9:40) →青森駅発 (10:00) →函館駅着 (12:02) →昼食→市立函館博物館 (14:30～15:30) →市立函館北方民族資料館 (16:15～17:45) →夕食

【4日目 8月11日金曜】

勝山館跡 (10:00～12:00) →昼食→志答館跡 (15:00～15:45) →函館空港着 (16:00) →函館空港発 (17:10) →羽田空港着 (18:30)

今回の調査は地域が広く、調査箇所も極めて多種多様であった。多くの事実を新たに知り、何よりも、文明の交流が人類史の展開に及ぼす影響力の大きさを、改めて実感する機会となった。しかし、残念なことに紙幅の関係上、全ての遺跡に対する所感を漏れなく披瀝することは出来ない。そこで、韓国の研究者として、特に印象深い遺跡二つのみを選び、二人の筆者が各々これを紹介し、若干の感想を記すに止めた。

II、三内丸山遺跡—生きた縄文博物館

8月8日、復旦、慶北の参加者は、早朝の目白駅に集合した。下田誠氏の案内により東京のラッシュアワーを抜け、大宮駅で他の参加者と合流し、八戸行きの新幹線に乗った。速さで知られた新幹線だが、スピードを体感するよりも快適さに浸りつつ、2時間半程を駆け抜け、八戸駅に到着した。雪と林檎の地青森県は、東、西、北を全て海に囲まれた、本州の最北に位置する県だ。休む間も無くJR線に乗換え、1時間余りで青森駅へ到着した。時刻はいつの間にか午後1時を回り、他国からの旅人は、異国の風景よりもひたすら腹が減るばかりであった。郷土料理館で食べた名も知らぬ青森の味は、恐らくすぐには忘れられないだろう。

昼食後、バスで三内丸山遺跡へ移動した。遺跡は青森駅の南西約4kmに位置し、陸奥湾へ流れ込む沖館川の右岸、標高200m程の河岸段丘上にある。縄文時代前期～中期(約5500年～4000年前)にわたる日本最大規模の集落遺跡群で、総面積は39ha(117,975坪)に達し、この内24.3haが平成9(1997)年に国の特別史跡に指定された。また、出土した1958点の遺物は、重要文化財の認定を受けた。このような意味からも、当遺跡は、日本で最高の縄文時代遺跡として差し支えないだろう。以前からは是非一度訪ねたいと思っていた。

初めに、平成14(2002)年開館の「縄文時遊館」を見学した。現在までに出土した各種縄文土器、石器、土偶、土や石で作られた装身具、木製品類、骨角器等、新石器時代の特徴を十分に示す遺物が、要領よく展示されていた。遺物の量はコンテナ約4500箱分に及び、未だ地下に埋蔵されたままのものは出土品の10倍に達すると推測され、その膨大さに驚きを隠せなかった。数々の遺物の中で特に目を引いたのは、他の地域から運び込まれた翡翠や琥珀、黒曜石等の存在であった。これは、既にこの時期には、遠

距離交易が成り立っていたことを物語るためだ。新石器時代の人間もまた、距離を問わず、交易と文化の交流を通じて、彼らの生活をより豊かにさせていたのだ。また、漆器類の出土をもとに専門技術を持つ匠の存在を想定している点や、瓢箪、牛蒡、豆等の栽培植物の出土、そして、DNA解析による粟の栽培確認等、この遺跡を通じ、縄文時代の研究が大きく進展した事実にも深い印象を覚えた。

遺跡内には、縦32m、横10m、面積約300m²、柱の直径が60～70cmに及ぶ巨大な建物を含む、10棟の大型竪穴住居が復元されていた。使用された巨木や、屋根を葺くために要した藁の量を想像すると、これほど巨大な建物を築造できた縄文人の、共同作業や協業のための社会組織が如何なるものであったかに、大変心を引かれた。この建物は、三内丸山遺跡の象徴である六本柱の長方形高床建築とともに、当時の人々のスケールの大きさを示し、様々なことを思い起こさせた。その他、成人の墓である土坑墓と幼児を埋葬した土器群、大量の遺物が捨てられた谷、実に1000年近くにもわたり造成された盛土、土器製作のための粘土採掘坑、貯蔵穴、道路址等が復元され、誰もが三内丸山に暮らした人々の生活の様相を容易に理解できるようになっていた。日本の学界の精緻な発掘と復元作業がもたらした、非常に大きな成果であった。

このような巨大遺跡を残した三内丸山の縄文人の末路は、如何なるものとなったのであろうか。縄文社会では、人間を生きた祭祀物(生贄)と見なして豊年を祈願したり、戦争を起し相互に殺し合わないことが判明している。更に、当遺跡からは、人命殺傷用の武器は発見されていないという。それならば、この疑問は環境史的な視点から考えるのが正しいのではないだろうか。あれこれと様々な思いを巡らせていると、一行が足を速めた。(崔根植)

Ⅲ、十三湊遺跡—中世港湾都市の繁栄

青森駅を立ち弘前駅に着いたのは午後6時頃であったが、8月の蒸暑さは、変わらずに旅行者の額を汗で濡らした。しかし、「山唄」という趣ある名の店で津軽三味線に合わせた伝統音楽を聞きながらの夕食は、一日の疲れを和らげるに充分であった。

二日目の踏査は、弘前市を基点に周囲の古代、中世の遺跡を巡った。初めに、弥生時代中期に造営された水田跡である垂柳遺跡(2000年、国史跡指定)を訪ねた。東北地方で最初に確認された古代の水田遺跡であり、この地域が稲作を伴う弥生文化圏に属することを立証した重要な遺跡だ。田舎館村埋蔵文化財センターでは、水田跡を発掘され

た状態のまま保存展示していた。1～3坪程度の小さな面積の水田と、地形を利用した水路は、韓国の蔚山市玉峴遺跡のものと同様に極めてよく似ていた。観覧者の関心を集めるために、水田に鮮明に残った足跡を自分の足と比較できるようにした展示手法は興味深かった。

今回の調査の白眉は、十三湖の秀麗な風光の中に位置する十三湊遺跡であった。当地の名物、ヤマトシジミラーメンの昼食を終え、中の島にある市浦歴史民俗資料館を見学し、中世港湾都市としての十三湊の繁栄を実感した。展示室の中央には、十三湖周辺の遺跡を示した地形模型があった。十三湊遺跡は、岩木川河口の潟湖である十三湖と、津軽半島北西部日本海に囲まれた砂洲上に位置し、港湾都市として発展するに相応しい絶好の地理的条件を備えていた。

また、領主館跡と推定される旧十三小学校周辺の発掘調査による遺物は、中世十三湊の活発な交易活動と、それがもたらした繁栄をありのままに示していた。出土品の中心は中世の土器、陶磁器類で、それらは中国や朝鮮各地で生産された貿易陶磁器と、日本産の国内陶磁器の二つに大別される。特に、高麗青磁と、青磁、白磁、青白磁、褐釉陶器等の中国産陶磁器が、大量に出土した。多量の貿易陶磁器を見ていると、ふいに、韓国の全羅南道新安郡の海底で発掘された元代末期の沈没船と、2005年に中国の山東省で発見された14世紀の高麗の貿易船が思い出された。その時期が、正に十三湊の最盛期とほぼ一致していたためだ。陶磁器をはじめ貴重な貿易品をいっぱい積み、中国や高麗の貿易船が日本海の荒波を越えて十三湊に入港する場面を想像すると、それ自体が、即ち三国の共同研究の主題たる「東アジア海文明」の歴史の一ページではないかと思えた。

それと共に、当遺跡の調査から、中世考古学の重要性を確認したことも望外の収穫であった。韓国では、考古学の研究対象は、主に先史時代と文献記録に乏しい古代の前半期に集中しており、中世にまでは及ばないのが現状だ。十三湊の歴史は、文献記録と共に、考古学の発掘成果を積極的に活用することにより、一層豊かに復元された。この点は、未だに文献記録と金石文等の文字記録に依存して研究が進められる、韓国中世史の将来の研究方向に対して示唆するところが大きい。

次に訪ねたのは、旧十三小学校内にある遺物整理室であった。涼風の吹き渡る廃校の屋上で、五所川原市教育委員会の榎原滋高氏から、発掘経過と成果に関する詳細な説明を聞き、重要な発掘品を見学した。領主館に居住した十三湊の支配者安藤氏の興亡と、土塁によって南北に分けられ、北の領主館と家臣団屋敷跡、南の町屋地区で構成された遺

跡の構造について、当遺跡の専門家たる榊原氏の解説により理解が進んだ。

日が傾くまで、十三湊の盛衰と関連した周辺の中世城郭遺跡の調査は続いた。15世紀後半、安藤氏が南部氏との抗争に敗北した際、一時的に避難したと思われる唐川城址や、巨大な外廊に取り囲まれた福島城址を訪ねた。強行軍の疲れが押し寄せる中、唐川城址の展望台で、十三湖の青い水面に砕け散る白い泡沫を眺めながら、それをしばしビールの泡かと錯覚したのは、暑さのためか、それとも私が無類の酒好きのためであろうか。(李文基)

IV、おわりに

史跡調査の3,4日目は、北海道函館市附近の道南十二館の内、勝山遺跡及び志苔館跡等の巡見であり、同様に密度の濃い日程が続いた。これらの史跡は、和人とアイヌとの葛藤と和解の痕跡でもあったが、同時に、志苔館近くで発掘された40万枚もの古銭が象徴する如く、活発な交流の現場でもあった。

この度の調査は、資料集の準備は勿論、綿密に計画された日程に沿い、少しの無駄もなく一行を率いた鐘江宏之先生と、交流ネットワーク班の努力により、実りある大きな成果を得たと思う。皆様に深く感謝申し上げますと共に、一緒に調査する中で、様々なことをご教示下さった学習院、復旦両大学の先生方にも感謝の言葉を申し上げたい。日中韓三国の研究者が揃って参加した調査は、今後の共通の主題である「東アジア海の歴史と環境」研究を深化する上で、豊富な助言や示唆を与えてくれるに違いないだろう。

最後に、最近韓国で、古代の交易と交流状況を把握できる港口施設「慶尚南道金海市長有面官洞里遺跡」が発掘されている情報を伝えたい。2006年3月に終わった第一次発掘調査の簡略な報告によれば、発掘区域をABCDの4つに分けて調査した結果、A区域では棧橋が、BCD区域からは道路遺構と、建物址24棟、井戸4基、竪穴13基等が確認されたという。A区域の棧橋は橋梁と護岸施設に区分され、出土土器から5,6世紀の遺跡である可能性が高いという。これを、道路遺構と合わせて考えると、韓国古代の港口施設の構造の把握と、それを利用した交易の実像までもを明らかにする良い資料となり得るものと期待されている。遠からず詳細な発掘成果が発表されれば、当研究プロジェクトにも、肝要な資料となるだろう。古代の港湾施設とそれを通した交流問題に着目させた点でも、今回の調査は筆者らにとって大きな収穫となった。

(翻訳：崔弘昭、大多和朋子)

十三湊遺跡調査記

学習院大学大学院博士後期課程 甲斐玄洋

2006年8月8日(火)～11日(金)、日本海調査を実施した。調査地は北海道渡島半島から本州津軽半島一帯における古代から近世の交易拠点であったが、その最重要地が青森県五所川原市の十三湊遺跡であった。本稿では、9日(水)に行った十三湊遺跡の調査について報告する。

十三湊遺跡は本州最北端の津軽半島西岸に位置する。室町時代半ば頃成立の文献の中で、日本の代表的港湾10のうちの一つに数えられた中世日本の主要交易拠点であり、近年の発掘調査によって往時の姿とそこで展開された交易の様相が解明されつつある。

当日は五所川原市教育委員会の榊原滋高氏に御案内いただき、最初に遺跡の中心に位置する旧十三小学校校舎を訪れた。現在の十三湊にかつての港湾都市の面影はない。だが、校舎屋上から遺跡全体とその周辺を眺望すると、当地が、西は日本海、東は十三湖に面し、海から陸への交通と運輸の上で至便な位置にあることが実感できた。

発掘調査は現在も継続中で、校舎内に設けられた遺物整理室には整理中の出土遺物が保管されていた。その多くは陶磁器であり、外国製品も多く見られた。出土陶磁器総数における13,14世紀の高麗青磁の割合は京都などのそれに比して高く、このことは十三湊が日本列島中央部を中継地としない国外との直接の交易地であったことを意味するという。中国・朝鮮半島の文物は、大陸に近い東シナ海・日本海南部沿岸地域から日本国内に流入し、そこから各拠点での中継を経て諸地域へ伝わったと考えがちだが、実は、より多元的な交易によって流入しており、その重要拠点として十三湊が機能していたことが理解できた。

続いて遺跡の各地点を廻った。遺跡は領主館地区・家臣団屋敷地区・町屋地区の3地区により構成されていたと推定されているが、領主館地区では土塁と堀を、町屋地区では道路区画の跡を確認できた。また、かつて日本海と十三湖を結んだ水路の跡を見学した。今では湿地帯となっているものの、その幅は船が入ってきていたことを想像させうるものであった。この水路跡沿いの北では船からの荷揚げ場の跡を、南では海と水路を往来する船の安全祈願と監視を行った浜明神を見学し、港湾都市十三湊の全体像をつかむことができた。

この後、周辺遺跡の唐川城と福島城の調査も行った。唐川城は十三湖と十三湊を一望できる高地に位置し、福島城は十三湖の北岸に面している。両城とも古代の環濠集落を中世に十三湊の領主安藤氏が城郭化したものと言われるが、はっきりしたことは未だ解明されておらず、十三湊との関係性など、その性格のさらなる検討の必要性が認識された。

十三湊遺跡が従来の交易史に再検討を迫る遺跡であることは周知の通りであるが、実地踏査により、交易史上の十三湊の大きさと、十三湊がそのような拠点でありえた理由を認識できたことは、本調査の大きな収穫であった。

多久聖廟調査記

復旦大学歴史地理研究中心副教授 楊 偉 兵

2006年10月15日、日本学術振興会アジア研究教育拠点事業「東アジア海文明の歴史と環境」大澤顕浩（学習院大学外国語教育研究センター教授）と「思想と知識交流班」研究員村松弘一（学習院大学東洋文化研究所助手）・崔弘昭（学習院大学客員研究員）・楊偉兵（学習院大学客員研究員）・倉嶋真美（学習院大学大学院博士後期課程）、および、高津孝（鹿児島大学法文学部教授）・則松彰文（福岡大学人文学部教授）・内田直文（九州大学COE研究員）は、九州佐賀県の多久聖廟の調査に向かった。その日は多久聖廟で祭孔大典が催されていた。

午前9:48分に聖廟に到着した。大澤顕浩教授・村松弘一助手は「祭孔典禮」の主催者側と交渉して、我々は招待を受け来賓として典禮に参列した。10:00ちょうど、祭

孔典禮が始まり、献官・祭官の入堂、詣廟・献爵・祝文、天籟楽礼、『論語』を詠頌して終わった。祭礼は正式なもので不備はなく、厳粛優雅であった。その後、本堂を開放し参観した。12:00「東原庠舎」で昼食をとり、「多久聖廟博物館」を見学した。午後1:35分、調査は終了した。

多久聖廟は江戸時代の宝永五年（1708年）に創建された。現在の建物は一体となっていて、周辺に他の屋舎はなく、聖廟は南面北坐している。南堂北室で構成され、南堂を本殿とする。聖廟は二重の屋根で、四隅は反り上がり、琉璃瓦を葺く。幅は五間、奥行きは六間である。聖廟の背後にはゆるやかな傾斜があり、全体を見下ろすと整然として官帽のようである。聖廟の北・東・南側に幅1メートルの排水溝があり、石垣は50cmほどの高さの礎石で聖廟を取り囲んでいる。東側には斜面が迫り、西側は比較的ひろく、20メートルで下斜面となる。廟の周囲には広く楷樹を配置している。本殿の正面20メートルのところに石造りの仰高門があり、その扁額には「仰高」の二字を題する。南堂内の天井には飛龍の絵があり、廂門の彫刻は精巧で美しく、麒麟・龍・鳳凰・草木等が隙間無く描かれており、荘重厳粛である。大堂の正面に奉る孔子像は圭を持って静坐しており、左右には孟子・子思二人の哲賢の立像を分けて奉る。中国の孔子廟と比較して、現在見られる多久聖廟の建物は大きくはなく、廂房は無く、碑文もほとんど無い。庠舎は比較的遠くに設置されている（東原庠舎は、聖廟の東南約100メートルの斜面側にある）。内堂は比較的狭く正方形であり、聖賢像は比較的小さい。しかし聖殿の歴史は悠久であり、古風簡潔である。さらに所在地は多久市郊外の公園で、緑の木が木陰をなしており、環境は素晴らしく、九州文化の聖地たるを失わない。（翻訳：倉嶋真美）



京都訪問記

復旦大学歴史地理研究中心副教授 張 曉 虹

8月5日、まだ旅次のほこりを払わずに、私は同僚の傅林祥副教授・学習院大学博士課程の放生育王氏とともに、京都へ向かう夜行バスに搭乗した。学習院大学の手配によって、我々は京都で平安時代と鎌倉時代の文化遺産を主に視察した。

西暦784年、日本・平安時代の桓武天皇は、宮廷と貴族との間の矛盾が激化したため、都城を平城京から山城国の長岡へ遷すことを決定した。つまり今日の京都である。新都は十年後に完成し、平安京と命名された。京都が日本の歴史文化において極めて重要な地位を占めていることにかんがみて、これによって、京都の歴史を代表する西本願寺・二条城・清水寺・金閣などの歴史文化遺産を重点的に視察した。

早朝、京都駅から出発し、我々は西本願寺へ直接向かった。出発前、かつて文献を閲覧したことがあり、西本願寺が開祖・親鸞聖人によって創建された浄土真宗本願寺派の本山であることを知っていた。初期における寺院の場所は今日場所ではなく、京都・東山に建立されていた。天正十九年（1591）に至って、初めて豊臣秀吉によって現在の場所へ遷され、そして、重建された。現在、我々が見るところのこれらの建築物は、寛永十年（1633）に修建されたものである。あいにく、現在の本願寺主殿はまたも大修築されており、我々は後ろの殿堂に回って参観できるだけであった。日中仏教寺院の形態・色彩および内部空間構造は明確に異なるが、内部からは両国文化の淵源と差異を感じ取ることができ、とりわけ、日本仏教寺院の外部色彩の美しさは、我々に極めて深い印象を留め置いた。

徳川幕府が、京都御所皇宮を保護するため、および、京都で天皇に参見する際に居住するために修建された二条城は、慶長八年（1603）に建築された。しかし、現在の二条城内の主要な建築物である二の丸御殿は、基本的に、寛永三年（1626）の二条城大規模拡張時に修建されたものであり、建築形式は日本の武士の風格—遠侍の間・式台の間・大広間・蘇鉄の間・黒書院・白書院などの部屋が二の丸御殿の池に沿って一式並んでいる—を代表している。色彩が鮮やかで美しい壁画・彫刻が精美な格子窓・奥ゆかしい金器および廊柱の鬘斗花型の隠釘などが、奢華華麗である。

二条城内の二の丸庭園は日本の皇室庭園の風格を代表し

ている。これは一つの典型的な泉水回遊式庭園で、池の周りに複数の石を配置し、庭園全体を変化に富ませ、すばらしい興味が次々と現れ、壮麗な二の丸建築群とはるか遠くから相呼応する様子を形成している。

昼食後、我々はバスに乗り、京都市東部の清水寺を参観した。清水寺は、延暦十七年（798）、坂上田村麻呂が、宝龜九年（778）に従僧の延鎮上人が音羽山の滝で観音を参拝した跡を改建して仏殿とし、それから桓武天皇の勅願寺となった。清水寺に到着する前、一段の坂道を歩かねばならなかったが、我々のように烈日のなか清水寺の風采を見ることを願う旅行者は少なくなく、路上の人の流れは往来が激しく、絶え間なく続き、寺の門前にある小道の両側の商店もまた人の往来が盛んでにぎやかであった。

まず目に入ったのは色合いが目覚めるように美しい仁王門であり、記念撮影の後、我々は寺の中に入り、著名な三重の塔・清水の舞台・経堂・開山堂・轟門・朝倉堂・阿弥陀堂をあまねく見た。思いがけず、我々は、経堂建築回廊の一角で、一つの明治初期に埋められた測量基準点の標石を目にした。かたわらの碑文の記載によれば、これは、明治八年（1875）、近代測量技術を利用して京都市街地図を制作するために、京都市内に配置された多くの基準点標石の残された一石であり、この説によれば、それが日本近代測量と地図製作史の重要な証拠であることは少しも過分ではない。当然、清水寺内部の高くそびえ立つ三重の塔と山を背に谷に臨む清水の舞台もまた同様に人を震撼させる。しかし、我々が親しみを感じたのは、清水寺は京都全体で最もにぎやかな寺院であるとほほみなすことができる点であり、午前に考察した西本願寺と二条城の静寂さとは異なり、ここは明らかににぎやかで騒々しく、願をかけて線香を求める人々が絶え間なく、あるいは合格のために、あるいは安産のために、この一点は意外にも中国の仏寺と極めて似通っている。

この日最後の行程は金閣の調査である。芸妓の演技で名を馳せる祇園の花見小路へわざわざ行って参観した。聞くところによれば、花見小路は夕方時分の火ともしごろになるごとに最もにぎやかとなり、またもっとも美しくなる—街道の両側の木造家屋内に相次いで明かりをつけ、低く垂れた竹すだれの下から酒を楽しむ客達の談笑する声がか

すかに聞こえてきて、化粧をして着飾った華麗な芸妓がチヨウチヨウのように通り抜けて街頭にいる一という。我々が行ったときは午後の最も暑い時分で、道には二、三の旅行者しかおらず、木製の水ひしゃくで清水をきれいな路面にまき、そのようにして温度を下げる姿が見られた。街道全体は十分に静かで、数時間後のにぎやかさと喧騒を想像するすべは全くなかった。

我々が金閣に到着したのは、すでに夕暮れ頃の閉館がせまった時間であった。もしかしたら、旅行者の大部分はすでに引き上げたので、寺院全体が物静かで普通とは違ったのかもしれないが、一瞬間、我々を来た時の乾燥した暑さから抜け出させた。金閣の正式名称は鹿苑寺としなければならないが、それは富士山・芸妓と並んで日本三大典型的印象の代表だそう。しかし、本当にその名声をあちこちに知れわたらせたのは、実は三島由紀夫の同名小説『金閣寺』に功績を帰すべきである。金閣は、元来、鎌倉時代

の西園寺公経によって建てられた山荘であったが、室町時代の足利義満が応永四年（1397）にこの別荘を手に入れた後、それを修建して別府・北山殿とした。義満逝去後の応永二十九年（1422）、夢窓疎石を開山開祖としてそれを禅寺に改建し、ならびに義満の法名で命名し“鹿苑寺”とした。

舍利殿金閣を中心とした庭園は、衣笠山を背景としている。池の中央にある金閣は、表面の大部分に金箔を貼り、夕日のもとでまばゆく光り輝いて、光を発し、てっぺんには一匹の金色の鳳凰がとまっている。金閣は華麗さで名高い北山文化の代表的建築物としてみなされている。人を珍しさで感心させるのは、金閣は華麗に輝いているが、遠山と緑樹が際立つなかで、かえって、人に静かさを遠くまで広げる感覚を与える点である。事実、これは金閣だけでなく、ほぼ京都で参観した歴史建築物が我々に留め置いた、最も深い印象である。（翻訳：放生育王）

研究交流報告

学習院大学外国語教育研究センター教授 高柳信夫

2006年8月20日～23日、本事業の研究交流活動の一環として本学文学部教職課程の諏訪哲郎教授と共に上海を訪れ、9月21日14時から、復旦大学歴史地理研究中心において、講演を行った。高柳が「梁启超思想和地理知識—以地理環境和地理和中国學術思想史的關係為中心」、諏訪教授が「由語言類型地理看漢族文化的形成—從語言分布圖來剖析漢族文化的來歷」と題し、歴史地理研究中心の教員・大学院生を中心に約50名、が参加した。

高柳の発表は、まず、梁啓超（1873～1929）が1900年代前半に日本経由で「地理環境決定論」を中核とした近代地理学を中国知識人界に紹介した経緯、さらにその理論を自らの中国學術思想史の記述にいかに応用したかについて紹介した。さらに、地理環境に基づく必然性を持つとされた中国の「一統」化の趨勢と、學術思想の発展のために要請される「多元」化という相対立する要素をともに受容せざるをえないという難問に直面した梁啓超が、この二つの要素を、メタレベルの水準において、どのように理論的に統合しようと試みたかという点について、彼の1920年代の議論に基づいて論じた。

諏訪教授の発表は、まず、中国を中心とした東アジア地

域に、言語類型に関して、長城附近と長江の南側の地域に二つの境界線が存在することを指摘し、特に、政治的国境線や自然的障壁が存在しない南方の境界線は、いかなる意味を持つものかと問題提起を行った。そして、歴史的に言えば、南方の境界線の方が古いもので、それが次第に北方へと移動していったと見られるとの仮説を提出した。また、この言語類型の南方の境界線は、8000年前～5000年前の高温期における亜熱帯と温帯の境界線とほぼ一致することから、それは、初期農耕段階のイモ栽培民族と雑穀栽培民族の分布の境界を意味するとの見方を提示し、さらに、イモ栽培民族と雑穀栽培民族の言語に対立が見られる「動詞と目的語の語順」「修飾語と名詞の語順」といった要素について中国語を見た場合、その類型は、両者の融合体ともいえるもので、いわば漢民族の文化は、北上してきた南方民族と土着の北方民族の文化的融合の結果として形成されたものと見られる、との仮説を提示した。

それぞれの発表の後には活発な質疑がなされ、講演終了後、さらに歴史地理研究中心の張偉然教授、朱海浜副教授、中国文学系の陳引馳教授らと今後の交流活動等を含め、様々な意見交換を行い、多くの収穫を得ることができた。

彙報

◇セミナー

第1回：2006年7月22日（土）13：00～17：30

「海からみた文化交流の歴史—東アジア海文明を考える—」

会場：関西大学以文館学術フロンティアセンター

4階アジア文化交流センター

* 報告者・報告題目については3頁を参照。

第2回：2006年11月11日（土）9：30～17：30

「隋唐期東アジア仏教の宗派意識

（隋唐時期東亜地区仏教の宗派意識比較）」

会場：学習院大学西2号館503号室

* 報告者・報告題目については4頁を参照。

◇シンポジウム

中国史学会第7回国際学術大会（第51回学術発表会）

「中国的開埠城市与東亜の文物交流（중국의 개항장과 동아시아 문물 교류）“Chinese Open Ports and Cultural Exchange in East Asia”」

日時：2006年6月8日（木）～6月11日（日）

会場：国立釜山大学校

第4次発表会：分科会議3 第2分科

（成学館102号室）10日（土）9：00～11：00

「8세기 전반 일본견당사 파견의 여러 단계

（8世紀前半における日本遣隋使の諸段階）」

（鐘江宏之／学習院大学文学部助教授）

討論：李根雨（韓国・釜慶大）

「중국고대와 동아시아해 문명

（中国古代と東アジア海文明）」

（鶴間和幸／学習院大学文学部教授）

討論：鄭炳喆（韓国・全南大）

第5次発表会：分科会議4 第2分科 10日（土）

11：20～12：40

「당대 소그드인과 동아시아 교료

（唐代のソグド人と東アジア交流）」

（福島恵／学習院大学大学院博士後期課程）

討論：金相範（韓国・韓国外語大）

◇講演会

①外国著名学者招聘講演会

（慶北大学校師範大学歴史教育科主催）

日時：2006年4月4日（火）

「이중혁명（프랑스혁명과 산업혁명）재고

（二重革命〔フランス革命と産業革命〕再考）」

（福井憲彦／学習院大学文学部教授）

②慶北大学校開校60周年記念

2006外国著名学者招請講演会

日時：9月8日（金）10：30

会場：愚堂教育館201号室

「동아시아의 해양세계와 일본의 중세

（東アジアの海洋世界と日本の中世）」

（家永遵嗣／学習院大学文学部教授）

③中国史学会第52回学術発表会

日時：9月9日（土）

会場：昌原大学校人文大学第1セミナー室

「語言与真理—禅宗与程朱儒学衡量語言價值的比較」

（馬瀾昌也／学習院大学外国語教育研究センター教授）

討論：安洵亨（韓国・昌原大）

④譚其驥歴史地理講座（復旦大学歴史地理研究中心主催）

日時：2006年9月20日（水）14：00～16：20

会場：復旦大学歴史地理研究中心2201会議室

「梁啓超思想和地理知識

—以地理環境和地理和中国學術思想史的關係為中心」

（高柳信夫／学習院大学外国語教育研究センター教授）

「由語言類型地理看漢族文化的形成

—從語言分布圖來剖析漢族文化的來歷」

（諏訪哲郎／学習院大学文学部教授）

◇フォーラム

第6回「都市・上海の歴史と環境」

日時：8月7日（月）13：00～15：00

会場：学習院大学北1号館406教室

「都市化と郷村聚落の空間過程

—近百年上海東北部の聚落変遷」

(張曉虹／復旦大学歴史地理研究中心副教授)

「志丹苑遺址と呉淞江の変遷」

(傅林祥／復旦大学歴史地理研究中心副教授)

通訳：呂静(復旦大学文博系副教授) 参加者16名

第7回「銅鏡から見た東アジア海文明」

日時：10月27日(金)18:00～20:00

会場：学習院大学北1号館401号室

「中国古代の青銅鏡—鏡の中の詩人達—」

(林裕己／山九株式会社)

参加者：37名

◇セクション・スタディ・ミーティング(SSM)

第4回：4月27日(木)16:20～19:00

於北2号館6階人文科学研究所会議室

「蔚山調査記」(中村威也／学習院大学非常勤講師)

「沖縄大型グスク調査記」

(田中大喜／駒場東邦中・高等学校教諭)

「楽浪漢墓・高句麗壁画調査報告」

(鶴間和幸／学習院大学文学部教授)

参加者17名

第5回：6月2日(金)17:00～18:30

於北2号館6階人文科学研究所会議室

「崇明島調査記」(浜川栄／共立女子大学非常勤講師)

「日本古代贈位制の研究状況—日中比較に向けて—」

(牧飛鳥／学習院大学大学院博士後期課程)

参加者15名

第6回：7月7日(金)18:00～19:30

於北2号館6階人文科学研究所会議室

1. ご挨拶(鶴間和幸)

2. 平成18年度の共同研究の概要(村松弘一)

3. セクションI研究計画報告

4. セクションII研究計画報告

参加者14名

第7回：9月27日(水)17:30～19:00

於北2号館6階人文科学研究所会議室

「邗溝調査報告～中国最古の運河を訪ねて～」

(浜川栄／共立女子大学非常勤講師)

「2006年度日本海調査報告」

(牧飛鳥／学習院大学大学院博士後期課程)

参加者14名

第8回：10月25日(水)18:00～19:00

於北2号館6階人文科学研究所会議室

「黄河故河道調査記」

(長谷川順二／学習院大学大学院博士後期課程)

参加者14名

◇出版

후꾸이 노리히꼬(福井憲彦)「이중혁명(프랑스혁명과 산업혁명) 재고

(二重革命〔フランス革命と産業革命〕再考)『歴史教育論集』第37輯、2006年8月

나까무라 타케야(中村威也)「울산 학술답사기(蔚山調査記)」同上

◇成果発表

中国水利史研究会・シンポジウム

「中国・日本の治水・水利技術の比較研究」

日時：2006年11月3日(金)10:00～11:00

会場：荒川知水資料館

「前漢期黄河故河道の復元

—河南省北部・滑県～衛輝～新郷～延津～武陟」

(長谷川順二／学習院大学大学院博士後期課程)



ネットキャンパス開通式典（2006年9月7日）におけるバーチャルテープカットの場面。正面左から福井憲彦氏（学習院大学文学部長）・永田良昭氏（学習院大学長）・崔弘昭氏（学習院大学客員研究員）・呉吉煥氏（東京都立大学大学院博士後期課程）。

編集後記

『ニューズレター海雀 Umi-Suzume』第2号をお届けします。

活発な活動を反映して、頁数も前号より8頁増加となりました。本号には、2006年3月から11月までに実施されたセミナー・フォーラム・共同調査の報告・参加記などを掲載しております。

2007年度も「東アジア海文明の歴史と環境」の活動へ温かいご支援・ご協力をよろしくお願ひします。

（下田）

日本学術振興会アジア研究教育拠点事業

「東アジア海文明の歴史と環境」

ニューズレター海雀 Umi-Suzume 第2号

発行編集：学習院大学アジア研究教育拠点事業事務局

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1

Tel：03-3986-0221（内線5743）Fax：03-5992-9218（人文科学研究所）

e-mail：asia-off@gakushuin.ac.jp

HP：<http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~asia-off/index.html>

発行日：2006年12月22日

印刷：株式会社理想社

